



令和4年6月6日

#### フェリー・クイーンコーラルプラス

与論島へは、鹿児島空港と沖縄県的那覇空港から琉球エアラインのプロペラ機が、また鹿児島港と那覇港からそれぞれフェリーが就航している。

与論島は沖縄本島の辺戸岬から20kmほどしか離れていないため、沖縄本島から行った方が所要時間は少ない。したがって前日に那覇入りしていた。

沖縄と鹿児島を結ぶフェリーには乗ったことがなかったこと、またこれまで訪ねてきた本島周辺の島々を船上から観察できるという理由から、今回は那覇港からフェリーを利用することにした。

前泊したネストホテル那覇西から徒歩で那覇港に向かう。那覇港に最も近いホテルに泊まったので、約5分で着いた。切符売り場で、「梅雨前線の活発化の影響で波が高く、与論港に入港できないかもしれない」といわれ、条件付きでの乗船だった。

那覇と鹿児島を結ぶ航路はマルエーフェリー㈱とマリックスライン㈱の2社が交互に運航している。この日はマルエーフェリー㈱の運航日にあたり、同社の「クイーンコーラルプラス」に乗船した。那覇港を7時に出発し、沖縄本島の本部港、与論島、沖永良部島の和泊、徳之島の亀徳、奄美大島の名瀬を経て、鹿児島港に至る。翌日の8時30分に鹿児島港に入港するので、丸1日と1時間30分を要する。

与論島までの運賃は、奄美・沖縄交流割引期間中で1,420円割り引かれた。一方、燃料油価格変動調整金（BAF）が480円加算されたので、合計3,350円であった。飛行機よりも約1万円安い。

「クイーンコーラルプラス」は総トン数：5,910トン、乗客定員は604人、乗用車44台、トラック（9m）43台、トラック（12m）26台を運べる。マリックスライン㈱は「クイーン

ンコーラルクロス」というもう1隻のフェリーを有しており、2隻のフェリーを交互に運航している。

那覇港を7時に出港して、次の寄港地・本部港には9時に着く。Bデッキのあるレストランが開放されていたので、レストランの椅子に座り、与論島に関する資料を読む。

本部港に近づくと辺野古の埋め立てに使う土砂を運搬するガット船が数多く待機していた。伊江島に行った時（今年の4月）に利用したフェリーがちょうど伊江島に向かって出ていくところだった。

フェリーは瀬底大橋を通らず、瀬底島を迂回して本島の先端に向かう。売店は寄港するたびに開く。店では書籍も販売しており、下野敏見著「奄美諸島の民俗文化誌」（南日本の民俗文化誌10）を購入した。再びレストランで本を読む。

沖縄地方はすでに梅雨入りしており、雲が厚く垂れこめ、太陽は全く見られない。暗く夕方のように、視界は数kmほどだろう。10時30分ごろから雨になる。かなり激しい雨に変わってきた。風も強く、白波が目立つ。ただフェリーは大きいので揺れはさほど感じられない。船上から眺める予定だった伊平屋島も伊是名島もガスがかかり全く見るができなかった。フェリーに乗った意味はなかったが、やむを得ない。

11時30分ごろに与論港の棧橋に近づいた。かなり激しく風が吹き、寄港できるのか気をもんだが、係留用ロープが投げられ、どうやら上陸できそうである。定刻の11時50分にタラップを降り、無事与論島に足を踏み入れた。外は激しい風雨である。南国レンタカーの軽自動車を迎えにきていたので、急いで飛び乗った。



本部港沖に待機する辺野古への土砂を運搬するガット船（左）、与論港の岸壁（右）

### 隆起サンゴ礁の島

与論島に来るのは2010年12月以来、2回目になる。およそ12年ぶりだ。この時は水産庁が実施した「輪番休漁」（燃油高騰対策として輪番で漁業を休み、休んでいる間は水産資源を増やすための様々な環境整備の活動を展開し、これに対して賃金補助をする事業。与論島では漂着ゴミの回収、サンゴの保全、ウミガメの保護の活動が行われた）の政策評価のための調査に来たのだった。与論町漁協で聞き取り調査をして資料を収集、その夜は与論献奉（宴会の参加者全員がそれぞれ口上を述べ、焼酎を回し飲みする。これが原因で新型コロナのクラスターが発生したようで現在は中止されている）の洗礼を受け、3次会まで付き合った。翌朝、島内を見物したが、島の全体像を把握するまでには至らなかった。

与論島の中心地にある南国レンタカーの事務所まで行き、手続きを済ませる。12 時を回っていたので、漁協の隣の泰斗寿司で豚カツ定食の昼食を食べる。島の寿司屋に入って豚カツはないだろうが、時化で水産物は期待できなかったからだ。寿司を看板に掲げてはいるが、町の定食屋さんみたいな店だった。ここに町田原長著 (1980 年)、「与論島民俗文化史資料」(私立民俗文化資料館) が置いてあったので、拾い読みした。

雨なので外を歩くことができないため、とりあえず島の周回道路を走って、島の概要を把握することにした。

与論島は隆起サンゴ礁の島である。面積は 20.47 km<sup>2</sup>、周囲は 23.7 km で、奄美群島のなかでは、与路島、請島に次いで下から 3 番目に小さい。島の周囲には大規模なサンゴ礁が広がり、特に島の東側で発達している。

島の中央部を南北と北北西～南南東に走る辻宮断層が、また東西方向に朝戸断層が走る。島の最も高いところの標高は 97m で、上述した断層を除くとほぼ平坦である。

奄美諸島の島々と同様、与論島の為政者は時代と共に変遷した。与論島では、奄美世、按司世、那覇世、大和世と時代区分している。奄美世は 616 (推古 2) 年を境にそれまでの植民地的関係から朝貢時代に移って大和朝廷に従属、701 (大宝元) 年に大宰府が設置されるとその管轄下に置かれて日本の領土であった時代。按司世は、824 (天長元) 年に経済的理由から大宰府の管轄外に放棄され、按司 (地方の首長) の群雄割拠する時代で、約 440 年間続いた。いわば戦国時代である。那覇世は 1266 (文永 3) 年～1609 (慶長 4) 年の間で琉球王朝が統治した時代で、与論島に琉球文化が色濃く残るのはこのためだ。大和世は 1609 (慶長 14) 年～1871 (明治 4) 年までの薩摩藩が支配した 260 余年間、奴隷的植民地支配で困窮をきわめたとされる時代である。この時代は沖永良部島の行政管轄下にあった。

明治維新後、鹿児島県となり、明治 41 年に島嶼町村制が実施されると 1 島 1 村の与論村が誕生した。しかし、戦後は米国民政府の統治下に置かれた。1953 (昭和 28) 年に日本に返還され、1963 (昭和 38) 年に町制が施行され、現在に至る。沖縄県の本土復帰は 1972 (昭和 47) 年のことなので、それまでの間は沖縄本島と与論島を隔てる海が国境だったのである。

島の人口のピークは 1935 (昭和 10) 年の 8,630 人、世帯数 1,817 戸であった。2020 (令和 2) 年の国勢調査時の人口は 5,119 人、世帯数 2,160 戸なので、与論島の人口は漸減傾向にとどまり、世帯数はむしろ増えている。日本の多くの離島では人口が大きく減少しているケースが多いので、与論島は極めて異例である。このように比較的人口が維持されているのは島の面積の半分以上が農地で、農業が盛んだったこと、さらに 1970 年代からの観光ブームが島の経済を支えたためである。ちなみに与論島の農家人口 1,751 人、農家数 771 戸で、1/3 が農業に従事している。

## 内周道路

与論島には内側と外側に島を一周する道路が整備されている。内周道路は県道 623 号線で、別名「与論循環線」と呼ばれている。1 周は 23.7 km である。この内周道路に沿って南陸運柁という会社が路線バスを運航しており、島で唯一の公共交通となっている。南回り (反時計回り) と北廻り (時計回り) があり、日に 5 便、合わせて 10 便が走る。ただし新

型コロナの影響で現在は8便に減便されている。

この内周道路沿いに小学校（3校）、中学校（1校）、高校（1校）が置かれている。与論島の集落は、茶花、那間、古里、朝戸、城、西区、東区、立長、叶の9つに区分され、家々は島内に広く分散している。

そして3つの小学校毎に校区が設定されている。茶花校区（茶花小学校）は茶花、立長の2つの集落、那間校区（那間小学校）は那間、叶、古里の3つの集落、与論校区（与論小学校）は朝戸、城、西区、東区の4つの集落から構成されている。人口が最も多いのが茶花の集落で、島全体の1/3強を占めている。

在校生は小学校3校で317人、中学生170人、高校生110人で、小さな島にもかかわらず、子供たちは多い。なお、ふるさと留学生（島外から移住した人）は、今年度は2人（中学生1人、高校生1人）である。ちなみに昨年度は4人（中学1、高校3人）だった。留学生を受け入れる里親制度はなく、親子留学、孫子留学で、身内と一緒に与論島に移住することを基本としている。

内周道路を時計回りで走る。茶花の集落の次が那間で続いて古里、古里から東区まで直線道路となり、道の両側にはサトウキビ畑が続く。次いで西区となり、朝戸、さらに城の集落が続く。朝戸には与論小学校と与論中学校が道の両側に置かれていた。続いて立長を経て、茶花に戻る。島の中心部のあたりが叶の集落である。県立与論高校は茶花の集落にあり、島の中央部の高台に置かれている。

要所要所で写真を撮ったが、内周道路を一周するのに要した時間は30分ほどだった。



町立与論中学校（左）、県立与論高校（右）

## 外周道路

引き続き海岸沿いの外周道路を時計回りで走ることにする。

外周道路には「ヨロンマラソン」のコースが設定されている。与論マラソンは1992（平成4）年2月から始まった。毎年3月に開催され、ハーフとフルマラソンの2つのコースがある。ハーフは外周道路を1周、フルは2周する。コース上には1kmごとに距離を示す標識が立つ。

茶花の市街地を出てすぐのところに「よろん島きび醋本舗」の工場があった。サトウキビ汁を煮詰め、酵母発酵するとアルコールができる。これを甕に移して島に天然に存在する酢酸菌を活用して酢酸発酵させ、2～3年の自然熟成を経てきび酢になる。テマ・ヒマかけて

つくられるから高価だ。工場の前の庭には発酵熟成中の甕がずらりと並んでいた。たしか鹿児島県垂水にある「黒酢」の工場でもこんな風景をみたことがある。

島の北側に「島バナナ」のノボリを掲げたバナナの畑があった。風よけのためバナナには袋がかぶせてある。販売中とノボリに書かれていたが、農園内には誰もいなかった。

外周道路は内周道路よりも低い位置になり、周辺にはサトウキビ畑やサトイモの畑などが目につく。島の東側の道路沿いには人家はほとんど見られない。



マラソンコースの距離表示（左）、よろん島きび醋本舗の発酵甕（右）

## 与論民俗村

島の南東端付近に与論民俗村があった。外周道路沿いに駐車場があり、ここに車を停めて傘をさしながら歩いて与論民俗村に向かった。土産物売り場と休憩所の建物の入口に窓口があり、ここで入場料の500円を支払う。管理人の菊秀史さんが村内を案内してくれた。

ここは、菊千代さんが自宅敷地内に建てた民具を中心とする施設の資料館である。1966（昭和41）年に建てられたので、すでに半世紀以上が経過している。1927（昭和2）年生まれの子代さんは今年1月にご逝去されている。現在は次男の秀史さんと奥さんの友子さんが施設の管理運営にあっているようだ。

大阪在住の画家藤沢治雄氏が、「島の人たちはいらなくなった民具を軒先に捨て、それを本島の人たちが持ち帰る光景を見て、『もったいない、与論独自の民具を守っていくべきだ』と民具の大切さを説いた」のが資料館づくりを始めたきっかけだったようだ。菊家が所有していた民具に加え、贈答品、購入品などを含め、合わせて2,000点以上の民具が収蔵されている。

最初に案内されたのが円錐形の茅葺屋根の歴史的な古民家で、母屋と台所が別棟になっている。秀史さんの説明では、与論島は台風の直撃を受けることが多く、家屋がしばしば破損したので複数の建物を建ててリスク分散を図ったとのことだ。雨戸をあけると室内には大量の民具が置かれ、母親の千代さんが織り、奥さんの友子さんに受け継がれている芭蕉布の製造工程を示した写真のパネルが置かれていた。

その裏には島内から収集した様々な素焼きの壺を展示した家がある。さらにその奥に赤瓦の琉球風の家が建つ。与論島は沖縄本島に近いから沖縄文化の影響を色濃く受けているという。

庭の一角に砂糖車が置かれていた。サトウキビを絞るため牛に牽かせた道具である。2頭

の牛が牽いたと思われるが、直径は10 mほどに及ぶ。庭にはバナナによく似る芭蕉の木も植えられていた。

最後に休憩所で、月桃茶とパパイヤの漬物をお茶受けとしていただいた。ちなみにこの時期は月桃が白い花を咲かせていた。土産物コーナーにはパパイヤの漬物の他に黒糖関連商品、島産の塩などの食品類の他に、草木染めのTシャツや芭蕉布の織物なども展示されていた。ただしあまり魅力的な商品はなかったもので、何も買わなかった。



与論島の古い家（左）、生活に用いた各種壺を収納した壺小屋（右）

### サザンクロスセンター

島の南、与論城跡の近くにサザンクロスセンターがある。海岸沿いを走る外周道路は前浜海岸の区間が工事中で通行止めになっており、内周道路にでてサザンクロスセンターをめざしたが、途中で道に迷ってしまった。紆余曲折を経てやっと辿り着いた。

サザンクロスセンターは与論島の数少ない観光施設で1993（平成5）年3月にオープンしている。島の歴史、芸能、民俗、物産などを総合的に紹介するミュージアムである。与論島は南十字星が見える最北端の島であることから名付けられた。すでに30年近く経過していることやこまめな維持管理が行われていなかったこともあってか、老朽化は否めない。

建物は5階建てで、エレベーターが整備されている。400円の入場料を支払って、すぐに展望室のある5階に上がった。5階の海拔は106mというから島で一番高い場所だろう。展望室からは島全体が見渡せる。さらに沖縄本島、伊平屋島、伊是名島、沖永良部島などを眺望できるはずなのだが、外は雨が降り、周辺の島は全く見えない。おまけに窓ガラスは鍵がかけられたままなので窓越しに写真を撮るはめになった。しかし窓ガラスに水滴が付着しきれいな写真は撮れない。

4階は星座、昆虫や植物などの自然、与論を愛し島に住んだ小説家の森瑤子の遺品などを展示、3階には、サバニの現物が置かれ、漁業関係の民俗的資料や貝類などの標本が並んでいた。別室に島出身の画家である池田政敏の作品が展示されている。奄美大島に住み、南国の特徴的な画風を確立した田中一村に似た作品もあったが、一村の物まねの域を出ない。2階には与論島の農具や民具、大島紬などが展示されている。2階から1階にかけてはスロープになっており、与論十五夜踊りの他に奄美諸島、トカラ列島の伝統的な祭りの紹介、与論島の古い写真などが展示されていた。1階には与論島の特産品などが展示されている。

入場者は私の他に1名。観光のオフシーズンだからやむを得ないのかもしれない。管理人

は60歳代と思われる女性が1人。サザンクロスセンターから外周道路を歩いて茶花の集落に戻る。



サザンクロスセンターの外観（左）、館内に展示されているサパニ（右）

### サトウキビと製糖工場

茶花の市街地の少しはずれに「南島開発」と書かれた大きな煙突が立つ。現在は与論製糖(株)と社名が変更されているが、与論島で唯一の製糖工場だ。1963（昭和38）年から分蜜糖を生産してきた。この時期はすでに収穫期を過ぎており、工場は閑散としていたが、1～3月ごろの収穫期は活気にあふれていたことだろう。

与論島では薩摩藩が支配していた時代からサトウキビがつくられ、他の奄美諸島の島々と同様に藩の財政に貢献していた。島の農業は自給自足を基本としていたがサトウキビだけは換金作物として現金収入源であった。製糖工場ができる前は、牛や馬の力を借りてサトウキビを絞り（上述した砂糖車）、煮詰めて黒糖をつくっていたが、工場の進出によって製糖能力は一挙に高まった。

現在は黒毛和牛の繁殖生産にトップの座を譲っているものの、サトウキビの生産は与論島最大の産業だった。2020年農業センサスによると、与論島のサトウキビ生産農家は599戸、栽培面積は394haであり、生産量は25,921トン、生産額は約6億円である。サトウキビ畑は島の総面積（2,058ha）の約2割を占めており、与論島にとってきわめて重要な作物であることに変わりはない。

ただ、与論島のサトウキビ生産は、ピーク時（1985年前後）には60,000トンを超えていたので、現在は半分以下に落ち込んでいることになる。また生産農家数も半減した。宮部（2020）は与論島のサトウキビの収穫作業はいまだに手刈りのところもあり、機械化（ハーベスターの導入）が遅れていると指摘する。耕地が狭隘で、機械化を妨げており、土地基盤整備の促進が課題だという。さらにサトウキビ生産の減少は製糖工場の採算にも影響を与えるため、設備の更新が進まない可能性もあると指摘する。

与論島に限らず、南の島々の農業はサトウキビに大きく依存している。しかし外国産に比べ生産原価は際立って高いため、政府は甘味資源作物交付金として、2022（令和4）年度でトンあたり16,860円を交付している。つまりこの交付金によってサトウキビ生産は辛うじて成り立っているわけだ。

島の経済を維持する上でこの交付金はきわめて重要であるが、一方でサトウキビ一辺倒

の農業はリスクが大きく、耕種の多様化が大きな課題となっていよう。



サトウキビ畑（左）、与論島製糖株の製糖工場（右）

## 島の玄関口

製糖工場西側の小さな半島域に、与論空港、地方港湾与論港、茶花漁港（第1種）があり、一帯は島の玄関口になっている。与論港は半島の北側の茶花地区と南側の供利地区に分かれる。両地区を挟んで滑走路長1,320mの与論空港がある。また茶花地区に隣接して九州電力の新与論発電所が立地されている。ちなみに燃料はA重油で、陸揚げに便利な港湾地区に位置しているわけだ。フェリーは風向きによって茶花ないし供利のどちらかにつくが、本日は供利地区に入港した。

供利地区の南はずれに漁船の船溜まりがある。地図には供利漁港と書かれているが、正式には港湾だ。この漁港には12年前に訪れたことがあり、現地を訪ねて記憶が蘇った。輪番休業で漂着ゴミの回収を行った時の活動拠点の一つだったと思う。

漁港内の水は降雨の影響で著しく濁っていた。港内に漁船が2隻、斜路に漁船5隻と船外機6隻が陸揚げされていた。

漁港へ下る坂の途中に、(株)コスメディアラボラトリーズ与論工場と書かれた建物があつた。12年前にはなかった建物だ。この建物の上段に牛舎があり、そこで牛糞の処理をしていた女性に聞くと、塩をつくっているという。枝条架のような施設がないところをみると、海水を直接平釜で煮詰めているようだ。採算をとるためには塩の売価を高くしなければならず、たぶんこの手の事業は線香花火のように終わるだろう。

半島域をひと通りまわって連泊するホテル青海荘に入った。前回来た時もここに泊まっている。ホテル青海荘の前の通りは「銀座通り」と呼ばれ、飲食店や商店が立ち並ぶ。通りの南端の奥まったところにAコープがあり、島で最大のスーパーである。通りを北に進むと中央通りにぶつかり、やはり飲食店や商店が並ぶ。与論島で唯一の黒糖焼酎のメーカーである有村酒造（ブランド名：島有泉）もこの通りにある。

夕食は中央通りにある「海将」に入った。時化で漁船は出漁していないため水産物は期待できないから、ソーキ煮と奄美特産の豚味噌をつまみにオリオンビールと島有泉を飲む。後に後述する奄美地方の伝統料理である「鶏飯」の小を食べる。観光客はおらず、店はガラガラ。銀座通りも人影はまばらで、休んでいる店も多い。与論ブームのころは肩も触れ合うほど人通りが激しかったようだが、今は夢幻の如くである。





茶花の銀座通り（左）、供利漁港のコスメディア与論工場（右）

令和4年6月7日

### キハダマグロの水揚げ

与論町漁協の魚市場は朝8時から入札が始まる。朝食を済ませてすぐに魚市場に行った。ところが昨日は時化だったので、上場した漁船は1隻のみで、サワラとブダイがほんのちょっと並ぶだけの寂しいものだった。幸い、漁港の岸壁では、八幡丸というマグロー一本釣り漁船がキハダマグロの水揚げ作業をしていたので、しばし見学する。

船長はまだ30歳代と思われる青年で、若い女性が水揚げ作業を手伝っていた。

漁場は与論島から100マイルほど離れた東シナ海（黒潮本流の西側海域）で一本釣り（夜焚き）によって獲ったという。3泊4日の単独の釣行で朝戻ってきたところだった。餌はムロアジやイカを使うようだ。

全部で10尾ほどのキハダマグロが水揚げされた。大きいものは60kgほどあっただろう。内臓はきれいに取り除かれ、船倉の水氷に漬けこまれている。デリックで吊り上げられたキハダマグロは陸上部に置かれたFRP製のボックスに収納された。もちろん水氷が施されている。全部のマグロが収容できたので、けっこう容量は大きい。恐らくボックスごとフェリーに積まれ、那覇か鹿児島に出荷されるのだろう。

引き続き漁協で話を聞こうと思ったが、漁協の職員に参事の出勤時間を聞くと、この日は遅番で10時に出てくるというので、改めて出直すことした。



船倉から引き上げられたキハダマグロ（左）、水氷を張ったクーラーボックス（右）

## 与論町役場

市場見学を終えてから、与論町役場に行く。開庁時間の8時30分ちょうどに着いた。

以前、与論島を訪問した時は、与論町役場は漁協に近い海沿いに置かれていたが、2020年1月に町立診療所跡地の高台に移転している。おそらく海岸近くは津波の危険性があると判断したためだろう。役場はRC2階建の機能的な建物だった。

役場の入口にはサーモグラフィーが設置してあり、体温のチェックを受け、アルコール消毒をする。血圧を測り、中に入ると、女性が出てきて「どのようなご用件でしょうか」と親切丁寧に対応してくれた。

1階には令和4年5月末時点の人口と世帯数が表示されていた。与論町の人口は5,104人（男2,500人、女2,604人）、世帯数は2,632戸である。

2階の総務企画課に行き、町勢要覧を入手、隣の産業課で「与論町農水産業 概要」をいただき、建設課で管内図をもらう。教育委員会の生涯学習課で与論町誌を閲覧し、必要な箇所をコピーした。さらに与論町誌追録版や関連する資料を閲覧する。

コピーは全て役場の人が行ってくれた。料金は1枚6円といたって安い。

コピーに時間を要したため10時ごろに役場を後にし、与論町漁協に向かう。



与論町役場の外観

## 与論町漁協

10時に与論町漁協を訪ね、<sup>みさく</sup>箕作参事に1時間ほど話を聞いた。12年前にもすでに漁協の職員をしていたから面識があるはずだが、あまり記憶に残っていなかった。

現在の組合員は正55人、准220人の合計270人である。12年前は正が84人、准が208人だったので、正が29人減っている。参事によると資格審査を厳しくした結果だという。正職員は3人だが、臨時職員が2人いる。

昨年8月に福岡ノ場の海底火山が噴火、10月に入ってから茶花漁港にも大量の軽石が押し寄せた。このため、操業を休み人海戦術によって軽石を「たも網」ですくったそうだ。主力のソデイカ漁は11月がメインなので、大きな影響がでるのではないかと危惧されたが、思ったほど影響はなかったという。

与論町漁協で営まれている漁業は、基本的に12年前の調査時とは変わらない。ソデイカの旗流しが最も多く、マグロ・カツオ類の曳縄、旗流し、マンダイ、ムツ、タルメなどの底延縄、ホタテ、アカマツなどの瀬もの一本釣りがメインである。当時に比べ激減したのがタチウオの立縄で、現在はほとんど獲れない。与論海域からタチウオが消えてしまったようだ。

数量ベースで見た上位5種は、ソデイカ、マグロ類、シイラ、サワラ、ムツでこのうちソデイカが57%、金額ベースではソデイカ、マグロ類、ムツ、チビキ、シイラの順で、このうちソデイカが65%を占めていた（令和3年度）。

養殖業はモズク養殖を1経営体に取り組んでいたが、その後、一緒にやっていた人が独立したので、現在は2経営体が増えている。

与論町漁協の漁業生産額は長いこと2.5億円で推移し、比較的安定していた。しかし、コロナ禍にあって需要が減少したことから、2021年度は2.16億円で近年にない落ち込みを見せている。ソデイカは大衆食材で量販店を中心に売られているので単価はコロナ禍にあっても変わらないが、観光需要に支えられている伊勢エビ類、ヤコウガイなどの高級種は軒並み単価が下落していることが大きく影響しているようだ。資源はあるものの、価格が安いから獲らない状態だという。

漁業環境も厳しく、コロナ禍に加えて、A重油の単価が高騰している。セーフティネットでカバーされているが、最近のリッターあたり110円～130円で推移している。また、海の環境面では、ホンダワラ類やリュウキュウスガモなどの海藻類が減り、ウミガメが増えており、漁港の中でもよく見られるようになってきているという。この影響かサザエが大きく減少し、マガキガイも減っているらしい。

与論町漁協の漁業はソデイカに過度に依存している。資源変動のリスクを回避するために、足元のリーフ周辺での漁業を見直すべきとの機運が醸成されており、昔行われていた追い込み漁や素潜り漁の再開を目指している。若手グループで観光とタイアップした運営を想定し、近場での操業に見合った3トン程度の小さな漁船づくりを計画しているという。追い込み網などの技術は島に残っているので、古老の技術支援を得ながら実現していく予定のようだ。

なお、40歳代の若い漁業者は意欲的で、「儲かる漁業」で9.7トン型のソデイカ釣りの漁船が整備され、もう1人もリース事業で12月に漁船を建造することになっているという。

漁獲物の出荷先は沖縄県が最も多く、次いで鹿児島、島内、奄美大島と続く。ただしコロナ禍に入ってから鹿児島への出荷量は大きく落ち込んでいる。島内で消費されるのは金額ベースで4,000万円前後、全体の15～20%に相当する。ただし、島内消費も観光客の減少によって縮小している。12年前以前は6,000万円を越えていた。

なお漁協では加工事業（外部委託を含む）も営んでおり、ソデイカ切り身やゲソの冷凍品、同加工品、マグロジャーキー、モズク（生、塩漬け）などを販売している。そして漁協の事務所は加工品の販売所にもなっている。



与論町漁協の外観（左）、事務所内の水産加工品販売の冷蔵庫（右）

## 町立図書館

与論町の人口は約5千人だが、港の背後の高台に町立図書館が置かれている。人口7千人の鋸南町には図書館はなく、中央公民館に図書室が置かれているだけなので、与論町は人口規模からみてじつに文化的なのだ。図書館は月曜日が休みなので、昨日は閉まっていた。漁協で話を聞いてから11時に図書館を訪れた。開館時間は18時まで。

郷土コーナーで与論島関連の資料を閲覧する。そのなかに、佐野眞一著「唐牛伝」が置かれていた。唐牛健太郎と与論島がどう結びつくのか、不思議に思って、ぱらぱらとめくると、唐牛は1969年2月から7月までの約半年間、与論島に住んでいたことが、与論島との縁であることがわかった。60年安保当時の全学連委員長だった唐牛健太郎はその後様々な職業を転々とし、与論島にも来ていたのだった。46歳で短い人生にピリオドを打ったが、破天荒な人生を送った憧れの人だった。

図書館で、加藤正春著「奄美与論島の社会組織」、関西大学地理学洋室のレポートなどをコピーしてもらう。コピー代は1枚20円と、役場に較べると3倍以上も高かった。

## パナウル診療所

昼食を前日と同様、泰斗寿司でちゃんぽんを食べ、午後から島の周回道路以外の場所を回る。

ヨロンビレッジの背後の高台に木造のドーム状をした風変わりな建物があつた。よくみると「パナウル診療所」と書かれている。たまたま役場で「パナウル診療所が再開します」と書かれたパンフレットが置かれていたので、此処のことかと符合した。島の言葉で「パナ」は花、「ウル」はサンゴを意味するという。

在宅療養支援診療所・パナウル診療所は徳島県出身の医師・古川誠二さん(72歳)が1991年に開設した。古川医師は徳之島徳洲会病院から与論町立診療所を経て、離島の医療一筋に取り組んできた。このことが評価されて、日本医師会の第3回「赤ひげ大賞」を受賞している。いわゆる「プライマリ・ケア(初期治療)医」として総合医療に取り組んできた。週3回の訪問診療と往診、夜間も呼び出しにも備え、往診バックを常に準備し、在宅医療を志していた。与論町における自宅死の割合は61.7%(厚労省「在宅医療にかかる地域別データ集」)で全国平均の12.7%をはるかに上回り、老人ホームや病院のある市区町村の中では第1位であった。これを支えたのが古川医師だった。

パナウル診療所は古川さん本人が高齢化したため故郷の徳島に帰ることになり、2020年に閉院していた。しかし与論島には診療所が必要だとの島民の期待に応じて、今年から同医院を再開することになったという。新しく就任したのは小林真介医師で、鹿児島大学医学生時代にパナウル診療所で実習している。経歴をみると、埼玉県出身で、鹿児島の進学校ラ・サール学園に学び、東大文学部に進学、その後転身して2010年に鹿児島大学医学部を卒業したというから、途中からかなり筋金いりの医師になったことが伺える。

与論島には与論徳洲会病院という医療法人徳洲会が運営する総合病院がある。与論島で新型コロナのクラスターが発生して大騒ぎになった時、この病院をTVで観たことを思い出した。こちらの病院は茶花の中心地から少し離れたところにあり、この規模の島の病院としてはきわめて大きい。ちなみに徳洲会は徳之島出身の徳田虎雄氏が一代で築き上げた日

本最大の医療法人である。徳田は離島医療に力を注ぎ、鹿児島県や沖縄県の離島におそらく採算を度外視して病院を作り、島の医療に多大な貢献をしてきた人物である。

先代の古川医師は、徳田虎雄の出身地である徳之島徳洲会病院に勤務していたことが、離島医療に目覚めたきっかけだったのではないだろうか。



与論徳洲会病院（左）、斬新なデザインのパナウル診療所の概観（右）

## 与論島の産業

与論島はかつて農業と観光の島であった。後述するように、観光客の入込客数は1970年代後半がピークで、現在はその当時の1/3ほどに減少している。したがって現在は農業に大きく依存する「農業の島」になっている。与論島には山林はほとんどなく、車で走っていて目につくのはサトウキビ畑と牧草地である。これ以外ではサトイモの畑が目についた。ここで与論島の農業について整理しておこう。

表1は令和2/3年度の品目別の農業生産の現状を示したものである。同年の農業生産額は24.5億円ほどなので、漁業の約2.5億円を大きく上回っている。最も生産額が多いのは子牛生産の約15億円で島の農業生産額の6割強を占める。酪農に続くのが伝統的な栽培種であるサトウキビで約6億円であった。自給的農業はほとんど放棄されており、農作物は何れも換金作物を主体とし、サトイモ、インゲン、ニガウリが中心である。この他、花卉類、マンゴーなどの果樹づくりも近年取り組み始めている。

表1 与論島の農業生産の現状

		生産戸数	面積 (ha)	出荷量	出荷額 (千円)
畜産	子牛	270	391.7	2441頭	1,494,735
	成牛			21頭	5,144
工芸作物	サトウキビ	599	394	25921 t	602,707
野菜	サトイモ	142	30	226 t	136,824
	インゲン	121	20	127 t	111,746
	ニガウリ	12	1.5	64 t	29,265
花卉	ソリダコ	5	0.9	41万本	15,828
	トルコギキョウ	5	0.9	24万本	28,703
果樹	マンゴー、アテモヤ	-	-	-	22,100
				<b>合計</b>	<b>2,447,052</b>

「与論町町勢」より作成



牧草地（左）、サトイモの畑（右）

### 畜産業

牛は昔から与論島にとって重要な現金収入源であり、主として沖縄県に販売していた。牛の飼養は子牛の販売ばかりでなく、サトウキビの堆肥を得る目的も兼ねていたようだ。戦後、与論島における牛の飼養頭数は1,000棟前後で推移し、子牛の生産量は300頭前後であった。

子牛の生産量が増え始めるのは1990年代に入ってからで、2002（平成14）年には2,000頭を越えた。2000年代前半は単価の上昇もあった出荷頭数は増加し、2009（平成21）年には2,482頭を記録するが、その後単価の下落に伴って生産量は頭打ちになった。

2015（平成27）年ごろから再び単価が上昇し始め、これに対応して出荷量も増加、2020（令和2）年には2,779頭を出荷し、生産額は17.23億円になり、与論島を支える産業となっている。

令和2年の飼養頭数は5,669頭で、与論島の人口を上回り、人より牛の方が多くなった。一方、飼養戸数は年々減少しており、令和2年は268戸となっている。つまり1経営体当たりの飼養頭数は年々増加しており、畜産農家の規模拡大が確実に進んでいるわけだ。

子牛生産の生産意欲を支えているのは、単価の上昇である。2010年ごろの子牛の単価は30万円強であったが、2016年には74.2万円に急上昇、その後下落しているもののそれでも60万円をキープしている。



牛舎の親牛（左）、出荷を待つ子牛（右）

## 町営堆肥センター

内周道路の内側に町営の堆肥センターが置かれている。2005（平成 17）年度から稼働した。与論島の畜産業は放牧がほぼゼロ、もっぱら牛舎で飼われているから、大量の牛糞が発生する。各農家が個別に処理したのでは効率が悪い。そこで町は堆肥センターを作り島内で発生した糞をここに集めて一括処理している。農家は糞を収集車に渡せばよく、設備投資は不要になり、糞処理の労力も大幅に削減された。

堆肥センターの対面には「ゆんぬ敷料化ラブセンター」があり、こちらは 2011（平成 23）年度から稼働している。島内で発生した伐採木などを原料に牛舎の敷料を製造しており、これを農家に提供し、堆肥の品質改善と子牛の生産性向上に資するねらいだ。

牛糞はセンターに搬入後、天日干し・水分調整を経て第 1 回目の攪拌後、20 日間発酵させる。さらに天日干し後 2 回目の発酵を 20 日間行い、この作業を約 5 ヶ月間繰り返して、完熟堆肥を得る。

中熟堆肥は牧草およびサトウキビ栽培用に、完熟堆肥は、野菜、花卉栽培に使用されている。完熟堆肥は 1 袋（15kg 詰め）376 円、中熟堆肥はトン当たり 3,000 円で販売している。

つまり与論島では、牛糞堆肥は農地に還元され、島内における物質循環が成立しているわけだ。



堆肥センターの内部（左）、ゆんぬ敷料化ラブセンター（右）

## 土地改良事業

昨日はけっこうな量の雨が降った。茶花漁港の周辺は赤土を含んだ陸水が流入し、広い範囲が褐色を呈していた。てっきりサトウキビの植え付けに伴って赤土が流出したのかと思ったのだが、漁協の箕作参事の話では内陸部で土地改良の事業が行われているからだという。

内陸部の道路を走っていると、その土地改良の事業現場に出くわした。ショベルカーが 5～6 台導入され、畑地の整備が行われているところだったが、赤土がむき出しになっている。近くでは溜池の造成工事も行われていた。

与論島における平成 30 年時点の圃場整備率は 68.8%、畑地のかんがい整備率は 32.9% で、鹿児島県大島支庁管内の平均に比べると低い整備状況だという。耕地面積は狭隘で、農業の機械化が進まない原因になっているという。実際、サトウキビの収穫は未だ手作業で行われているところもあり、ハーベスターの普及率は管内でも低い。

また奄美大島、徳之島、喜界島、沖永良部島には県営、国営のダムが整備されているが、与論島にはない。溜池に依存しているわけだが、それでも不足気味のため、溜池の整備が進められている。



圃場整備の工事現場（左）、溜池の工事現場（右）

### 舵引き丘

舵引き丘は与論島のほぼ中央部、いわばへソにあたる場所に位置している。山というよりはなだらかな丘の上に展望台が整備され、与論島を 360 度見渡す観光スポットになっている。

昨日とうって変わり視界はきわめて良好なので、北の方角に沖永良部島が横たわり、西の方角に伊是名島、北の方角に沖縄本島を望める。

この地は与論島が誕生したとされる神話の土地である。シニグクとアマミクの2人の神が漁に出かけた時、船の舵が浅瀬に引っ掛かり、降り立ってみると、サンゴ礁がムクムクと盛り上がり、与論島が生まれたという神話だ。



舵引き丘から沖永良部島を望む（左）、茶花漁港とその先に伊是名島を望む（右）

### 東海岸

舵引きの丘から北上し、島の北端から東海岸沿いの道路を南下する。

最初に「Shima Hotel」という1棟貸しの宿泊施設に向かった。ここは12年前に与論島に来た時に昼食を食べた場所で、「郷土料理 島の味八郎」といった。名前は忘れてしまったが漁協の幹部だった人が建てた家で、奥さんがここで飲食店を営んでいた。漁協で聞いたと



ころでは、何でも奥さんが体を壊したため 2016（平成 28）年に廃業したそうだ。

この宿のホームページによると、関西出身の若者が譲り受けた（？）家をセルフリノベーションで改装し、2020 年 3 月から 1 棟貸しの宿泊施設として営業しているという。建物には誰もいなかった。誰がどのように管理しているのかわからないが、再出発した 2020 年 3 月は新型コロナウイルスの流行が始まったころであり、経営は大変苦戦しているに違いない。ロケーションは抜群で、目の前にサンゴ礁が広がる。

この建物の北側には小さな船溜まりがあり、船外機が 5～6 隻、斜路に引き揚げられていた。この船溜まりは当時からあったものだ。さらに北側には墓地が整備されていた。

続いて寺崎海岸に行く。こちらの海岸付近にも寺崎霊園と書かれた共同墓地があった。後述するように、与論島の海岸付近にはたくさんの共同墓地が整備されている。

黒花海岸、皆田海岸、船倉海岸、大金久海岸と続き、島の東側は美しいビーチが連続する。船倉海岸の近くに小説家の森瑤子の墓碑が置かれていた。不勉強だからこの作家の本は読んだこともないし、その名前を現地に来て初めて知った。

大金久海岸の入口に百合ヶ浜ビーチハウスという移住者らしい夫婦が経営する宿泊施設があり、ここに「薬草カフェピクニック」という喫茶店もどきの店があったので、ここで休憩し、「ヨロンフレッシュハーブスムージー」とやらを飲んだ。

東海岸の南端付近に「奄美十景」に数えられる場所がある。干潮時には、この沖に砂洲を見ることができる。この砂洲は百合ヶ浜と呼ばれる与論島の名所になっている。この場所に平成天皇の妃殿下が詠まれた歌碑が立っていた。平成天皇皇后陛下は 2017（平成 29）年 11 月に奄美諸島を訪れているが、この訪問時に詠まれたものだ。

南の島々 遠く来て 島人と共に過ごしたる 三日ありしを 君と愛しむ



1 棟貸しの宿泊施設・Shima Hotel（左）、百合ヶ浜を見渡す海岸に立つ平成皇后陛下の歌碑（右）

### 赤崎鍾乳洞

島の南東端の赤崎海岸を眺め、麦屋漁港を見る。漁港内に係留されている船は船外機 8 隻、漁船 1 隻だった。斜路にも 10 数隻の船外機と漁船が係留されていたが、あまり漁業が盛んな様子は見られない。

昨日訪ねた与論民俗村の少し先に「島の駅・くるまどう」という売店があった。この店は昔ながらの製法で黒糖を作っているようだが（株オニヅカ興産）、すでにサトウキビの収穫期が終了していたので、現場を見ることができなかった。2015 年にオープンした施設で、

カキ氷やキビジュースなどの飲料をするとともに、かりんとう、アンダギー、ピーナツ黒糖などの黒糖関連の菓子類やウコン、塩などを販売している。

与論島は隆起サンゴ礁の島だから鍾乳洞ができておかしくない。隣の沖永良部島はたくさん鍾乳洞が発見されており、ケイビングの聖地として知られている。

前日に島の南東部にある赤崎鍾乳洞を訪ねたが、あいにくの雨で洞内に水が溜まり、「その恰好では無理だ」といわれ、中に入るのを断念していた。この日は朝から雨はあがっていたので再び訪ね、入場料 500 円を支払って中に入った。

赤崎鍾乳洞は日本大学探検部の 4 人が 1965（昭和 40）年 3 月に発見したものだ。主洞から北と南に支洞が枝分かれし、北支洞は約 130m、南支洞は約 20m の比較的小さな鍾乳洞である。洞内に小さな川が流れ、その脇にスノコを敷いた歩道が整備され、電灯もついている。南支洞の広い空間からは人間や動物の骨が発見されており、土地の所有者によって保管されている。つまりこの洞窟にはかつて人が住んでいたらしいのだ。現在、鹿児島女子短期大学の竹中氏によってこの古人骨の鑑定作業が進められているようだ。

鍾乳洞はこの土地の所有者が管理する私的な観光施設である。管理人は私とほぼ同年代と思われる老人男性、ちなみに入場客は私 1 人だったので、退屈そうだった。



赤崎鍾乳洞の入口（左）、鍾乳洞の内部（右）

### 翔龍橋展望所

赤崎鍾乳洞から外周道路に出るが、前浜海岸の部分が工事中で通行止めになっていたのので、内周道路を経て朝戸集落にある按司根津栄神社を訪ねた。この神社は按司世の時代に、朝戸集落が生んだ按司根津栄（アジニッチェー）を祀った神社である。根津栄は源為朝の御落胤の伝説が残る人物で為朝譲りの弓術は天下一品とされ、1 人で琉球兵千人を打ち負かしたという伝説の豪傑であった。神社はちょうど改装工事中で、材木が山積みになっていた。

内周道路は断層上を走るが、立長入口から断層の下に向かう道路と交叉する。この分岐点は展望所となっており、断層下の与論島を一望できる。

坂を下って断層の下に出て、外周道路を東に向かうと、今度は断層上に登る急坂となった。その途中に翔龍橋展望所が置かれている。まさに心臓破りの丘で与論マラソンの最大の難所といわれている。

この日は晴れていたのので、目の前に沖縄本島がはっきりと見えた。与論島と沖縄本島を隔てる海は北緯 27 度線上にあり、沖縄が本土復帰を果たすまで、海に引かれた国境であった。

この海域では 1963（昭和 38）年から沖縄が復帰する 1972（昭和 47）年までの 10 年間に渡り、毎年、サンフランシスコ講和条約が結ばれた 4 月 28 日に本土側と沖縄側の関係者が漁船に乗り込み、海上で一緒になって祖国復帰運動が展開された。



按司根津栄神社の鳥居（左）、翔龍橋展望所から沖縄本島を望む（右）

## 与論城跡

翔龍橋展望所からさらに登ったところに与論城跡がある。標高 94m の高台にあり、南側と西側は断崖となっていて、天然の要塞を形成している。

与論城は琉球国北山王（今帰仁城主）の三男王<sup>おうしやん</sup> 舅が与論島の島主として来島し、1405～1416 年にかけて築城した。その後、北山が滅亡したため未完となっていた。1512 年に琉球国中山王の次男・花城真三郎<sup>はなぐすくまきさぶろう</sup>が来島して島主になると、未完成だった与論城を完成させたと伝えられている。

この城は沖永良部島の後欄孫八城跡<sup>ごらんまごはち</sup>とともに琉球王朝時代のグスク（城）の北限として注目されており、総面積が 3 万 m<sup>2</sup> を越えることから沖縄県を含めても最大級のグスクだったことがわかってきたという。

平成 5 年度に城跡の範囲確保を目的とした発掘調査が実施され、建物の柱跡や焼土の詰まった土坑が発掘されている。また、14～15 世紀を中心とする陶磁器が多数出土している。

この城は断層崖を城域に取り込んだ城づくりが特徴で、高さ 60m に及ぶサンゴ礁の崖が、天然の城壁になっている。また石垣の材料となるサンゴ石を確保でき、さらに崖下に水が湧くので水源の確保も容易であった。

ここは断層上の高台に位置することから、城跡からの景色は抜群で、茶花市街地を含めた島の西側を一望できる。

与論城跡の敷地内には、サザンクロスセンターの他に地主神社と琴平神社の 2 つが置かれている。

与論島は琉球王朝の支配下にあり、ノロを中心とする司祭が行われていたので神社はなかった。そこで薩摩藩は土着信仰であるシュニグ・ウンジャミ祭りの祭主である長老たちに、18ヶ所あったといわれる御願<sup>うがん</sup>の場所（御嶽？）を 1ヶ所にまとめるように命じて合祀したのが地主神社である。また琴平神社は 1824（文政 7）年に金比羅大権現を勧請し、1835（天保 6）年に石仁の巖島神社と朝戸の菅原神社を合祀して、1909（明治 42）年に現在の場所に建立された。

なお与論城跡の敷地内には畑や墓地もある。また国の重要民俗文化財に指定された十五

夜踊りの会場にもなっている。



与論城跡の崖沿いの道（左）、与論城跡から崖下を望む（右）

## 移住

城跡の一角に「口之津移住開拓民之碑」、そして分村移住を勧めた上野應介翁の頌徳碑が立つ。また左側には満州与論開拓団の慰霊碑が置かれている。

隆起サンゴ礁の島である与論島には高い山がない。高い山がないということは、水が少ない、燃料（薪）が少ないことであり、人が生活するにあたっては不利な条件であった。加えて平坦な土地は江戸時代からサトウキビ畑として開墾されてきたが、その利益は薩摩藩に収奪されていた。

自給自足の島は食料の生産に島の人口は規定される。島の土地は有限だから人口が増えれば食料を確保することが難しくなる。ひとたび天候不順等で飢饉に見舞われれば餓死の危険と隣り合わせになったのであった。

余剰の人口による食糧難を解決する方法は「移住」である。上野應介翁は1901（明治32）年から34年にかけて3次にわたり島民900人が長崎県口之津町に集団移住させた。当時口之津町は三井三池炭鉱の石炭の積出港となっており、島民は石炭出荷の労働者として働いた。さらに10年後には福岡県大牟田市三池に転住し、炭鉱労働者となった。



口之津移住開拓之碑と上野應介翁の頌徳碑（左）、満州与論開拓さんの慰霊碑（右）

一方、終戦間際の1944（昭和19）年には満州開拓団として島民約600人が中国錦州省盤山に入植した。多くの入植者が悲惨な目に合うが、敗戦により引き揚げてきた約260人は、故郷の与論島が米軍の施政権下にあったことから島に戻ることができず、鹿児島県田代町

(現錦江町)に集団移住した。そして当地の山々を開拓して自給自足の生活を送り、現在は茶の産地に変貌しているという。

## 墓地

沖縄本島の墓地は、今では一族郎党が眠る立派な亀甲墓だが、琉球文化の影響を多分に受けている与論島の墓地はこれとはいささか趣を異にしている。

与論島の墓は海岸沿いにあり、しかも最近区画整理されたところがほとんどだ。その墓地には、①立派な墓石が建つ墓地、②骨壺を埋めただけの墓地、③その中間形に、分かれる。しかも骨壺は内地と異なり、高さは50cmほどと細長くてしかも大きい。

このような特徴をもつ与論島の墓には次のような歴史的背景があったと推察される。

明治期までの与論島は岩壁の洞穴などに遺体を安置し、白骨化を待つ「風葬」が一般的であった。明治政府によって風葬が禁止されると「土葬」に変わった。土葬の場所は土を掘りやすい海辺の砂浜が一般的であったようだ。埋葬後、3～5年経つと骨を海水で洗い、素焼きの骨壺に詰めて祀った。しかし2003(平成15)年に島に火葬場ができると、土葬はなくなり火葬に変わる。つまり島に火葬の風習が定着してまだ20年ほどしか経っていないのである。

もともと土葬の場所であった海岸近くの土地を区画整理して、それぞれの家に配分し、ここに各家は墓地を建てた(どこの共同墓地も墓地の面積は同一で平等である)。風葬は骨を焼いていないからそのまま残る。骨壺が長くて大きいのはこのためだ。墓地を分譲された各家は墓石を建てた。早く建てた人の墓地は墓石の下に骨壺が収納されている。一方、墓石が未整備の家は、洗骨した骨を骨壺に収容し、墓が建つまでの間、土中に埋めて置く。3つの形態があるのは、墓地が整備されてそれほど時間が経っていないことから、墓石を早く建てた家とそうでない家が混在していることによる。

徳川幕府は異教徒による文化的進入を防ぐために、各家を各寺に所属させる「寺請制度」を導入して寺に縛り付けていたが、南の島々にはこの制度は及ばなかったようで、島に寺はない。加えて明治維新後に進められた廃仏毀釈は維新の中心的役割を果たした鹿児島県においてはより徹底していたのかもしれない。上述したように与論島にある神社は3つで、広い意味でも4つといわれているが、通常は寺の坊さんが執り行う葬儀や法事などの行事は与論島では神主が仕切るらしい。



墓石のない墓地に埋められた骨壺(左)、整然と区画整理された集団墓地(右)

この日は、ホテルに中学生が20人ほど泊まっていた。サッカーの試合か何かで島の中学校との対抗戦に来たらしい。

夕食はホテルから少し離れた「居酒屋ひょうきん」という店にでかけた。この店はけっこう賑わっており、顧客が多かった。キハダ、ハチビキ、サワラの刺身盛り合わせと豆腐チャンプル、厚焼き玉子を食べる。最後にモズク麺をたのんだ。てっきりモズクを練り込んだそばが出てくると思い込んでいたが、出てきたのはモズクそのものだった。井いっばいのモズクを酢醤油で食べるはめになった。スーパーで売っているモズク酢のパックは申し訳程度のモズクの量だが、久しぶりにふんだんにモズクを食べた。もちろん与論島でつくられたものである。

令和4年6月8日

### 魚市場

朝食を食べてすぐに、漁協の魚市場に行く。しかしカメラを忘れていることに気づき、あわててホテルに取りに戻った。

昨日に較べると出漁した漁船が多かったようで、荷捌場の床には、シビ、エラ、タコ、タマン、シロ、ザソ、ミミジャー、ニーバイ、クロシク、タマン、ヤナグレー、サザエ、アイゴなどがプラスチック製のトロ箱に入れられて並ぶ。

仲買人は10人ほどが集まっていた。漁協に仲買人として登録されている人は30人ほどであるが、通常は12~13人が参加するという。鮮魚商やスーパーなどが中心で、居酒屋は仲買人に入っていない。専門の小売業者が食べていけるようにとの配慮からだ。なお魚専門の小売店は3軒ほどに減っているらしい。

取引は入札制で、トロ箱毎に木札に白墨で価格を書いて中央の入札台に出す。高値を付けた人に落札する。落札者の紙が漁協職員の手によってトロ箱に並べられる。入札人は女性の漁協職員であった。

この日最も多く購入したのはAコープで、全体の半分ほどを買い占めたようだ。昨日に比べると魚は多いが、通常はシビやカツオも並ぶので、今日は少ない方だという。取引は9分で終わった。落札者は次々に自社の軽トラに魚を積み込み、引揚げていった。



トロ箱ごとの入札と仲買人（左）、入札台を仕切る女性職員（右）

茶花漁港は1種漁港だが、かなり大きな漁港で漁船がけっこう停泊している。与論島の漁船の8割はここを利用しており、特に大きな漁船は全て茶花漁港を使う。漁港内の陸域では

船底塗装の作業をしている人もいた。

ホテルに戻り、書類や荷物を整理し、出かける準備する。8時30分に再び役場に行き、血圧を測定した。前日までに見ていなかったところを回るべく、軽自動車を走らせた。

### 牛飼い・竹内泰敏さん

役場から内周道路に出て、内陸部の細い道路を通って外周道路に出た。この一帯は立長地区に相当するが、サトウキビ畑と牧草地が続く。外周道路に出てすぐのところに牛舎があり黒牛が飼われていた。車を止めると男性がいたので話を聞く。

竹内泰敏さんといい、82歳になるが現役の牛飼いで、いたって元気だ。奥さんとたまに旅行に出かけるなど悠々自適の生活を送っている。

道路を隔てた大きな牛舎は息子に譲ったようだが、小さい方の牛舎は竹内さんが管理している。兎に角、働くことが健康の秘訣だという。現在8頭ほどを飼養し、毎朝、牛に餌を与えるのを日課にしている。跡を継いだ長男の方は、成牛40頭、子牛20～30頭を飼育しているという。

竹内さんは与論島の観光ブームの頃、民宿を経営していた。観光客が減ったことから民宿を廃業して、建物は放置していたが、台風で破損して民宿として利用するのは難しくなった。ところがこの建物は牛を飼うのには適していたので、建物の1階を改造して牛舎にしたという。建物の壁には「ホテルヨロン」の看板が残っていた。ちなみに民宿時代に投資した分はすでに十分回収しているそうだ。

民宿経営の後には、サトウキビ、里芋、花卉などの栽培を経験したが、現在は牛飼いに専念している。竹内さんから牛飼いの詳細を聞いた。

牛の妊娠期間は約10ヶ月、その後、子牛の生育期間が8ヶ月～10ヶ月かかるので、3年に1回子牛を出荷できれば上出来だという。

餌は牧草を育てて乾燥、ロール状にして発酵保存している。12～3月はサトウキビの収穫期なので取り除いた葉を餌として活用する。それだけでは足りないので外国から輸入した「オーツヘイ」という牧草を使う。牛舎で現物を見せてくれた。

子牛は2ヶ月ほど母乳で育て、その後、濃厚飼料（麦をつぶしたもの）をたっぷりやる。濃厚飼料の価格はトン7万円ほどだ。竹内さんは基本的に朝と夕方2回餌を与えるが、多頭飼育の農家では朝1回だけのところが普通だという。

子牛は9ヶ月かけて約280kgに育てて、出荷する。1日に平均1.1kgほど体重が増える勘定になる。ちなみに肥育農家は10ヶ月かけて550～560kgに育てて売る。1日の成長は1.4kgになる。セリは2ヶ月に1回開かれており、現在は上述したように高値安定の時代が続いている。

発情期になると、人工授精士に授精作業を委託する。島には人工授精士が2人いる。肉牛は血統が重視されるので、血統書付の冷凍精子が用いられる。子牛を1頭出荷するのにかかる経費は30万円ほどなので、子牛生産経営の損益分岐点は約30万円といわれているようで、現在の価格は60万円を超えているので十分儲かる産業になっている。

与論島はサトウキビと観光の島だったが、今は牛に大きく依存している。そして、サトウキビ生産はトン22,000円になるものの、実勢価格は7,000～8,000円であり、その差額は政

府の補助金によっている。これに対して子牛の生産は健全な経営で自立しているという。

竹内さんは与論島の特徴も話ってくれた。

与論島はバイクや自転車で島内を一周できるコンパクトな観光地で、砂浜が多いのが魅力となっている。百合ヶ浜は潮流によって砂が集まるが、同時にゴミは取り除かれているのでいつもきれいが保たれている。島には部品工場が2社あり、就業の場がある。40～50歳代の人が比較的多く、彼らは役場や農協に勤めながら農業を営む半農半サラで、子供がいる。与論島に子供が比較的多いのはこうした就業構造が影響しているという。



牛舎となった竹内さんの民宿の建物（左）、民宿跡で飼われている親牛（右）

## 宴のあと

沖縄県が本土復帰を果たす1972（昭和47）年前まで、与論島はパスポートなしでいける最南端の地であった。このため、美しい海とサンゴ礁に囲まれた与論島は憧れの島であり若者を中心に人気を博し、徐々に観光客が増えつつあった。しかし如何せん交通アクセスが不十分であったから、年間の観光客数は1971（昭和46）年の時点で3.7万人にとどまっていた。

しかし1976（昭和51）年に与論空港が開港、翌年から鹿児島からの直行便が就航、さらに翌々年に那覇からの沖縄線が開通すると、観光入込客数は飛躍的に増加する。ピーク時の昭和53、54年には年間15万人を越えた。昭和51～60年の10年間は10万人以上の観光客が訪れていた。しかも7、8月の夏季に集中した。ホテル青海荘のある銀座通りは夜になると肩も触れ合うほどの若者であふれ、活況を呈したという。

観光需要の高まりに対応して、島内には相次いで民宿やホテルができ、1984（昭和59）年当時、ホテル9、旅館13、民宿67、その他3、合わせて92の宿泊施設ができるまでに拡大し、観光業は与論島の一大産業に発展したのであった。上述した竹内さんのところもこの観光ブームに便乗して民宿を建てたのである。

ところが沖縄県の本土復帰後、さらに最南端の石垣島が観光地として注目を浴びるようになると、与論島への観光客は急速に減少していく。2012（平成24）年には5万人に減少し、ピーク時の1/3になった。その後盛り返し、新型コロナが流行する前は7万人ほどに回復していたが、コロナ禍で急速に観光客は落ち込んでしまった。このため、最盛期には100を超えていた宿泊施設数は、現在、ホテル3、旅館・民宿等32、合わせて35に減少している。



製糖工場の隣にあった立長の与論島観光ホテルは12年前に閉館となり、島で最大の収容人数を誇った同ホテルは無残な廃墟を晒している。また東区の南風観光ホテルは放置されたまま、壁は藁で覆われていた。まさに宴のあとである。

与論島の宿泊施設は民宿が圧倒的に多かったが、時代の変化とともに畳の部屋にごろ寝するスタイルは受け入れられなくなった。「プレシアリゾート与論」のような豪華で高額のリゾートホテルがもてはやされるようになっている。



南風観光ホテル（旧南風荘）の跡（左）、旧与論島観光ホテルの残骸（右）

### ゆんぬあーどうる焼窯元

竹内さんと別れて、島の内陸部に入り、ユンヌ樂園を覗き、与論高校の前を通って島の東に向かう。途中、「ゆんぬあーどうる焼窯元」と書かれた看板が目に入り、わき道に入った。

「ゆんぬ」は与論、「あーどうる」は赤土を意味する現地語で、つまり「与論の赤土」という意味だ。

窯元を運営するのは山田幸子さんで京都の出身。もとは染色の仕事をしていたという。その後、鹿児島市内でアメリカ帰りの師匠について陶芸を修行し、1997（平成9）年に与論島に移住して窯元を開いた。ご主人は大工で、地元の釉薬原料の採集もしているようだ。

この窯の特徴は、与論島で採れる赤土と、ガジュマル、ヤシ、サトウキビの搾りかす（バカス）、サンゴ、海藻（草）などの天然物を釉薬として活用し、それぞれの釉薬の特徴を反映した色合いを出しているところにある。作品を見学していると、山田さんは一生懸命釉薬ごとの色合いの違いを解説してくれた。なお島では薪の確保が難しいことから、灯油窯が使われている。

建物には作業場、展示場が整備され、陶芸体験もできるようだ。また一棟貸しの別荘も有している。

展示場には様々な食器類が並んでいたが、あまり好みに合う作品は少なかった。ただ、靴や鞆などの陶芸品は絶品で、よくぞ本物そっくりのしかも触感ただよう作品を作るものだと感心した。このような陶芸作品を見るのは初めてであった。

東海岸に出て、昨日、見落とした船倉海岸、鳩の湖、森瑤子の墓碑をみる。付近では雉のツガイを見かけたが、その前にも見たことがあり、与論島では雉が増えているようだ。

茶花に引き返し、ヨロン観光協会を訪ね、島の墓について聞き取った。事務所内には与論産の塩や生姜、黒糖などの食品類が売られていたがあまり購入意欲を感じさせるものは少

なかった。

すぐ隣に朝市の会場があり、そこで地元の農産物を販売していたが、種類数は少なくこちらにも魅力はなかった。ちなみに与論島では地元農産物を売る店はほとんどなく、唯一品ぞろえがあるのが、Aコープで、ここでは地元野菜の他に地元の特産品も揃っている。



ゆんぬあーどうる焼窯元の建屋（左）、同窯元の商品（右）

## 鶏飯

図書館の女性にヨロン島ビレッジ内にあるレストラン「ヨロンの味たら」の鶏飯は美味しいと薦められ、昨日訪れたのだがあいにく休業日に当たっていた。薦められると行きたくなくなるのが人情で、昨日に引き続き訪れた。「ヨロンの味たら」は小綺麗なレストランで、私の他に老夫婦がやはり鶏飯を注文していた。たぶん誰かに薦められたのだろう。

鶏飯は、ほぐした鶏のささ身肉、錦糸卵、椎茸の煮つけなどをご飯にのせて鶏のスープをかけていただく奄美地方の郷土料理である。もう30年ほど前になるが、鹿児島で五洋建設の人に鶏飯なるものを教えてもらい、奄美の島々を訪れる機会があるたびに食べていた。



鶏飯の具（鶏肉、ノリ、パパイヤ漬物、紅生姜、椎茸煮、葱、錦糸卵、柚胡椒添え）

茶花の市街地に戻り、Aコープで与論産のバナナを購入する。10房で300円ときわめて安い。南国レンタカーに車を返却し、与論空港まで送ってもらう。

14時20分発の琉球エアラインのプロペラ機で那覇空港へ。途中、雲が低くかかり、本島周辺の離島はよく見えなかった。

## 【文献】

宮部芳照（2020）：与論島におけるさとうきび機械化の現状と課題，砂糖類・でん粉情報，42-62。

与論町誌編集委員会（2018）：与論町誌追録版、発行、与論町教育委員会。

関西大学地理学教室 鹿児島県与論町の地理、2006年度、